

大分県JICA派遣専門家連絡会会報  
第17号



---

●森 宣	
国際協力を志す前に、日本人は多様性を受け入れているのだろうか	1
-----	
●勝田 幸秀	
元気なタンザニア、元気なアフリカ	3
-----	
●林 理子	
「おおいた国際協力啓発月間 in2013」について	5
-----	
●高倉 志能	
ミャンマー・インレー湖におけるトマトの浮畑栽培	7
-----	
●佐藤 俊次	
植物における病気の診断と防除の重要性	11
-----	
●的野 慶子	
プーラビーダ	13
-----	
●仲元 歩美	
ザンビアー柔道	16
-----	
●衛藤 さき	
ガーナ滞在記	18
-----	
●坂田 優	
大分大学国際医療保健フォーラム HORIZON の活動紹介	20
-----	
●勝田 幸秀	
とっておきの写真1枚	23
-----	
●事務局便り	24
-----	
●大分県 JICA 派遣専門家連絡会申し合わせ事項	25

---

---

## 国際協力を志す前に、日本人は多様性を 受け入れているのだろうか

森 宣 (Hiromu Mori)

大分大学医学部臨床医学系  
放射線医学講座  
教授(1992 -)



2013年2月より三舟求真人先生のあとをつぎ、本会の会長を務めさせていただいております。大変光栄なことであり、本会が国際協力へますます建設的な貢献ができるように努力していきたいと考えています。どうぞよろしく申し上げます。巻頭言として、今年2月の本会の会合のうちに御挨拶した内容が言葉足らずと思われましたので、2013年11月末の時点で以下のように改めて考えてみました。御批評いただければ幸いです。

---

大分大学医学部に国際協力を勉強するサークル「HORIZON」が2013年冬に誕生して、これまでに数回の講演会を行った。国立大学医学部でこのようなサークルは極めてまれであり、三舟求真人名誉教授（前大分県 JICA 派遣専門家連絡会会長）が10年以上前に敷かれたフィリピン サンラザロ病院への毎年の医学部学生の派遣実習が実を結んだものとして、誠に喜ばしいことと思う。すでに1年生から5年生まで17人を数え、本会報でもいつか紹介の機会を持ちたいと思う。

若い人が国際協力を志すことは素晴らしいことであるが、そのきっかけは何かと聞くと、メディアによる国境なき医師団の活動や多くの天災に際してのボランティア活動などの情報に尽きるようである。自身の都合など振り捨てての援助活動は、一見華々しいし、尊いものである。メディアへの露出が若者の憧れをかきたてるのは悪いことではない。しかし急性期を過ぎたら、持続する中長期的な援助活動こそがより

求められており援助の成否を決定するものである。それは単純に個人の思いやりと行動だけでは解決できない局面ばかりである。政治や法律も含めての複雑な因子から答えを出さないとはいけない。若いサークルが模索しないとはいけないのがここであると思う。

最近「diversity ダイバーシティ、多様性」という言葉を耳にするし目にするが多くなったように思う。もともとは科学用語だと思われるが、米国で女性やマイノリティを積極的に採用するためのキャンペーンとして概念が広がった。人種、性別、文化、年齢、信仰などにかかわらず、多様な人材を組織は積極的に受け入れたほうが良いとする考え方は、日本でも広がりつつあるのかもしれない。日本は「国際化」「グローバル化」が必要であると叫ばれ始めて久しいが、はて、国際化に乗り出すその前にこの根本的な「多様性」を日本人は受け入れているのだろうか？私は「否」とはっきり思うし、これこそが日本人の致命的な弱点のひとつであると

思う。理屈の上では多様性は良いことだとわかっていても、感覚的には多様性を受け入れきれない状態であろうと思う。外国人と連れ立って歩いてみると、いかに多くの日本人が老若男女を問わず「外人」を不自然なまでに注視するかわかる。あるものは驚嘆、あるものは氷のような刺す冷たい視線、実に様々であるが、嫉妬というより拒否反応をみているように思う。

生を受けて以来、髪の毛の色、目の色、肌の色が千差万別の人たちに囲まれて育つドミニカ共和国のような国の子供たちと、ほぼ同じような外見の日本人に囲まれて育つ日本人の子供たちは確かに違いただろう。米国人のまだオムツをしてよちよち歩きの（つまり1歳ちょっとくらい）双子の男の子同士が、大人にはわからない言葉で激しく議論している動画を見せられて、微笑ましいと思いながら、果たして日本人でこんなことが有りうるのかなとも思う。

しかし幼稚園と学校教育に入る前はまだまだ柔軟であるが、「教育」の現場がその柔軟性を決定的に破壊しているのではないかと思う。あくまで私見とお許しいただきたいが、幼稚園の運動会の時点から皆同じように体操しないといけないという無言の圧力にさらされ、教師が同じように教えたいので生徒もレベルは均一でないといけない、という学校教育の基本理念のもと

に約12年間押さえられた若い人が、異文化、異人種に抵抗なく触れえるであろうか。同じような行動と価値観を求めながら、一方で議論ができなければいけませんよとディベート教育やチュートリアル教育を高校、大学あたりから急に導入する。みなさん多様性のある人間に育ててください、と言う学校の教師が多様性を認めていない現状があるのではないか。残念ながら、日本の教育は、均一横並びでないといけない、という imprinting（刷り込み）を形成する場からこの先もずっと脱却できないかもしれない。

本会の会員の皆様のなかで、日本を離れて現地に赴き、嫌が応でも多様性を理解せざるを得なかった、でもそれが自身の視野を大きく広げるきっかけだったと思いつ方も多いのではないのでしょうか。国際活動をするにつれ、何と日本人は優秀なんだろうと認識することも多かったに違いありません。しかし、日本人の優秀さはその均一性がベースにあるのだとしたら、それは多様性を認めえないという諸刃の剣でしょう。自身の優秀な能力を磨くという理詰めの努力をしながら、imprinting を否定して多様性を認める作業をするという「感覚を磨く」ことが国際協力なのかもしれません。本会が目指すもののひとつがここらあたりにあるように思います。

(2013.11.28)

---

# 元気なタンザニア、元気なアフリカ

勝 田 幸 秀

独立行政法人 国際協力機構 九州国際センター（JICA九州）所長  
Katsuta.Yukihide@jica.go.jp

---

今年（2013年）3月、JICAタンザニア事務所での3年半の勤務を終えて日本に帰国して感じたことの一つに、日本でのタンザニア、というかアフリカ一般に対するイメージが現実とずいぶん掛け離れているという事があります。アフリカと言えば飢餓とか貧困とか内戦、そんなことばかりが国内では報道されていたためなのでしょう。少なくとも、私の住んでいたタンザニアは、経済が順調に成長し、陽気で親切けど少しばかりいい加減な、素敵な人たちが暮らしている、平和でとてもいい国でした。

私の初めての海外勤務は20年以上前の1990年から3年間のタンザニア勤務で、家族で赴任し、三男は現地で生まれ、とても思い出深い、楽しい時期を過ごすことができました。このタンザニア勤務が縁で、その後の海外勤務はアフリカを強く希望し、願いがかなって2002年から2年間のジンバブエ事務所、そして、2009年9月からは2度目のタンザニア勤務となった次第です。

18年ぶりのタンザニアの中心都市ダルエスサラームは、社会主義時代の面影を残した、のどかなかつてのタンザニアとは大違いで、街にはビルが林立し、郊外には巨大なショッピングセンターができ、小奇麗なレストランやカフェがそこかしこにある、近代都市に生まれ変わっていました。



写真1 ダルエスサラーム中心部の遠景

一方で、普通の日本人が足を踏み入れない下町の雑踏と混乱は昔のまま、街を出ると水道も電気もなく茅葺屋根の掘立小屋が点在する農村の風景も何も変わっていません。発展して様変わりしたタンザニアと昔のままのタンザニアが併存しているのが新しいタンザニアでした。

タンザニアの経済成長率は2000年以降毎年6%を維持し、以前は鉱物資源もなく、コーヒーや綿花といった第一次産品の輸出でしか外貨獲得源のなかった国が、1990年代後半から金鉱山の開発が進み、21世紀に入ると天然ガスが発見され、更に有望なウラン鉱も出てきて、資源開発が進んでいます。資源だけでなく、経済の自由化に伴って製造業やサービス業も発展し、これらがダルエスサラーム繁栄の源泉となりました。

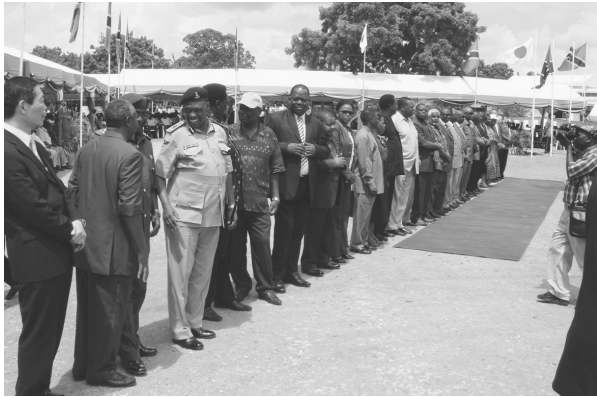


写真2 日本の援助による道路建設の起工式にて大統領を迎えているところ

この流れはタンザニアに限ったことではなく、新たな資源の発見、経済自由化による産業の発展はアフリカの他の国でも見られます。また、アフリカは人口増加率が高く、現在約10億人の人口が2050年には21億人、2100年には、中国やインドを抜いて36億人になるという予想もあります。経済発展と人口の増加は購買力と購買人口の増加を意味し、イギリスの調査機関が世界の投資家に対して行った、次なる投資先を尋ねるアンケートでアフリカは1位となっています。

今年(2013年)6月に横浜で開催された第5回アフリカ開発会議(TICAD V)では「躍動するアフリカと手を携えて(Hand in Hand with a More Dynamic Africa)」を基本メッセージとして、今後のアフリカ開発の方向性について活発な議論が行われました。日本の援助も発展著しいアジア一辺倒でなく、アフリカへの支援を増やしてきています。JICAとしては、発展の恩恵にまだ浴していない人たちを忘れることはできません。

日本ではまだ遠い世界にあるアフリカが実は地球レベルで存在感を増していて、資源、経済、あるいは政治の分野においても世界全体を左右する存在になりつつあります。経済や社会指標だけを見れば、まだまだ低いレベルにあるアフリカは、その分だけ今後大いに成長する可能性を持っていますし、すでにその兆しが表れています。陽気で元気なアフリカから、私たちも元

気をもらうことができます。グローバル化が叫ばれている今、もっともっとアフリカに目を向けていきましょう。きっと新しい未来が開けてきます。



写真3 ダルエスサラームの市内バス 相撲の力士が頑丈さの宣伝に使われています。

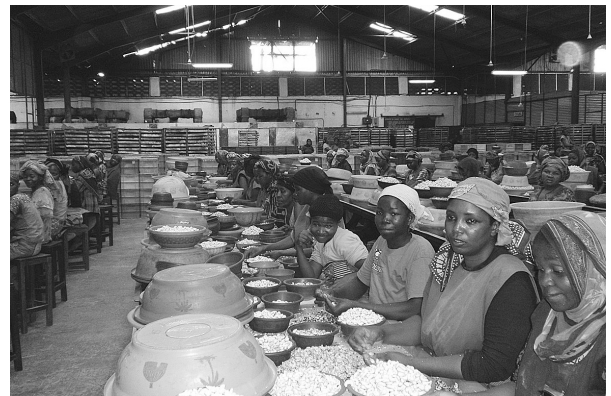


写真4 カシューナッツの加工工場 すごい人海戦術でした。



写真5 駐車禁止の看板 違反した場合、罰金2万シリング(約1,000円) または懲役3年の刑

---

## 「おおいた国際協力啓発月間in2013」について

林 理 子

大分市企画部文化国際課  
国際化推進室主事  
oitacias@eagle.ocn.ne.jp



---

10月6日の「国際協力の日」に合わせ、毎年10月に大分市とJICA九州が共同で「おおいた国際協力啓発月間※」を開催するようになり、今年で8年目を迎えました。

参加団体、来場者数も年々増加してきており、今年の「おおいた国際協力啓発月間 in2013」では、31参加団体による19イベントが催され、10月31日現在で延べ5,301人の方にご来場いただきました。国際関係団体の増加やイベント内容の多様化により、多くの方に国際交流・国際協力の機会を提供する場が増え、事業の充実が図られてきていると感じています。

大分県JICA派遣専門家連絡会におかれましても、例年おおいた国際協力啓発月間にて講演会等を開催していただいております。今年も10月12日の「国際協力のプラットフォーム」というイベントの枠組みの中で、元JICA派遣専門家による講演会を行っていただきました。毎年、貴会の講演会に参加していますが、内容もさることながら他団体の行う講演会と比べ参加者も多く、皆さんの熱意と意識の高さにいつも感心させられます。

一方、ご来場いただいた方々から高い評価をいただいているにもかかわらず集客に苦戦している団体も多く、イベントによって来場者数にばらつきがあるようです。こうした状況を踏まえ、今一度イベント内容、規模の変遷に伴い、開催方法を見直す必要があると考えています。

来年も同様に開催する「おおいた国際協力啓発月間 in2014」において、より魅力の多いものにするため関係団体の皆さんとともに、そのあり方について検討してまいります。

貴会員の皆さんにも是非、これまでと同様にお力を貸していただくとともに、本事業のイベントに積極的に足を運んでいただき、ともに「おおいた国際協力啓発月間」の輪を広げていただければ幸いです。

※ 市民の皆さんに国際協力についての意識を高めていただくため、大分市、JICA九州、国際関係団体等が10月に市内各地で国際交流・国際協力イベントを集中的に行う事業



写真1 10月12日～13日 物販イベント  
「国際協力のひろば」(主催：大分市)

APU学生サークルやフェアトレードショップ、国際関係団体が様々な商品を販売



写真2 10月12日～13日 複合型イベント  
「国際協力のプラットホーム」(主催：JICA九州)

おおいた夢色音楽祭とステージをともにし、  
民族衣装ファッションショーや活動報告会、  
パネル展示等を実施



写真4 10月27日 コンサートステージ  
「地球のステージ2～国境を越えて」(主催：大分市)。

世界の紛争や災害の地で医療活動を行う桑山  
紀彦さんが、現地で暮らす人々の生きる強さ、  
そして輝きを映像・音楽・語りで伝えるコン  
サートステージを開催



写真3 10月12日 講演会「国際協力で見えた南米パラグアイの  
農業試験研究＝植物にも病気の予防と治療が必要＝」  
(主催：大分県JICA派遣専門家連絡会)

元JICA派遣専門家による赴任先での活動  
報告



# ミャンマー・インレー湖における トマトの浮畑栽培

高倉志能

おおいた有機農業推進  
ネットワーク顧問



## はじめに

この調査は18年前、1988年4月25日、ミャンマーのインレー湖におけるトマトの浮畑栽培を、現地調査したものと、その後、私の勤務する園芸研究開発センタータウンジー支場に以前勤務した職員に聞き取り調査したものをまとめたものである。

インレー湖は海拔 1,000 m を超す山に囲まれ、シャン州の州都タウンジーから 30 km のところにある。インレー湖は 100 平方 km の広さで水深は 1 m から 7 m である。80 の島があり、水上に 18 の村を作っている。家も学校も水の上、5 万人余りの人が住み、人々は湖の上の高床式の家に住んでいる。生業は織物、漁業と稲作およびトマト栽培を中心とする農村である。世界的にも珍しい湖上でのトマト栽培を見た。

## \* 浮畑の性質と浮畑つくりの方法

インレー湖は自然にできた浮島がある。浮き島の表面は平らではなく整地を必要とする。土質は泥炭のようである。浮畑の高さは湖の上 10cm から 15cm である。浮き床の準備のため、浮き島の一部を切り取る。浮き床畑の切り取りには 2 つの部分が必要である。そのサイズは高さ（深さ）が 1m 以上、幅が 2m とする。垂直方向に鋸で切り取るが、そのためには 2 人が必要で一日に 200m を切ることができる。これには相当の熟練が必要のようである。切出した後、2 艘の船で浮き床農園を設定する場所まで運ぶ。

また、浮き畑の準備のためには湖中に生育した藻、浮草の収穫から始まる。収穫した藻の上に泥を上げて畑を湖上に作るわけである。

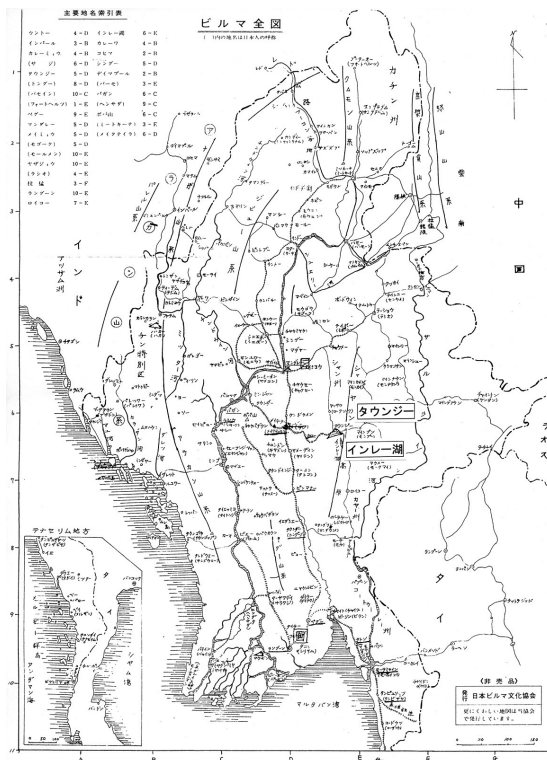


図1 ミャンマーの地図

**\*浮き床に柵を作り、場所を準備する**

浮き床が所定の場所まで運ばれた後で大事なことは 畝を貿易風の方向に向けて作ること。それは浮き床を安定させるためのようだ。浮き床はそれに穴をあけて竹の支柱で固定する。その為には6つの柱が必要である。囲いをするためには古くなった浮き床が使われる。

**\* 耕作の方法**

直径15センチの穴を23センチ間隔で2列にわたってつくる、培土は浮き床1つ当たり16.6kgの沃土と窒素、リン酸、カリ25gの肥料を混ぜてそれを穴に入れ、1つの穴あたり3本のトマトを移植する。移植するトマトは20日から25日のものを使う（1列に600本一つの浮き床当たり1,200本となる）

① 1年に2回作付する

播種期

1回目 3月から4月

2回目 8月から10月

移植期

1回目 4月から5月

2回目 9月から10月

収穫期

1回目 7月から8月

2回目 1月から2月

② 手入れと施肥

定植後、泥炭の層を支えるためと、2つの苗を支えるため2つの苗に沿って支柱を立てる。定植当初は若い水草を使い、大きくなったら古い水草を使う。

施肥の割合は浮き床一つあたり窒素を120kg、リン酸125kg、追肥に160kgとする。

**\* 収穫**

収穫は10日の間隔で12回にわたって収穫される。生産のピークは6回から7回目である。1つの苗で3.3kgのトマトが収穫される。したがって1つの浮き畑あたり3tが得られる。

即ち1ha当たり60tである。最後の収穫の時トマトは1.5mから2mの高さになる。

**\* 害虫と病気**

栽培者はウイルスに強い種子を使う。ウイルスによる被害は種子の選定と農薬の使用のため害は殆どないとのことである。

害虫には蟻巻にマラチオンとEpnを、アブラ虫や他の害虫を防ぐために使われる。

**\* 販売**

収穫されたトマトは車や列車で大都市に運ばれる。都市におけるトマトの値段は、シーズンオフ（雨季）の最も高い時でkg当たり6ギルダーであるという。シーズン時の値段は最高で50セント。これは市場にトマトが沢山出回るためである。生産者は売値の60%を受け取る。残りの40%は小売り、仲買、運送費と労賃である。

**\* 浮き床1つあたりのコスト**

浮き床1つあたりの制作から栽培、販売にわたるすべてのコストは1,000ギルダー(3,500チャット)である。浮き床1つあたりの平均売り上げは1,600ギルダー(4,800チャット)である。

**\* 天候の条件**

雨季、暑季そして乾季の3つのシーズンがある。雨量と気温は表の通りである。

表1 タウンジー 月別気温(Taunggyi Temperature):  
タウンジーの気温グラフ

タウンジーは、中国と国境を接するシャン族の住むシャン州の州都。政治、経済の中心地

月別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均最高気温(°C)	24	28	29	29	26	25	25	24	24	25	24	21
平均最低気温(°C)	10	13	14	18	18	18	18	18	17	16	13	9
降水量(mm)	3	0	3	71	114	173	234	274	411	119	111	1

\*問題点と考察

- ① 沢山の竹、穴や支えが必要で準備に手間がかかる。
- ② 熟練労働を必要とすること
- ③ 作物を拡大してはならないとする政府の政策。これは湖の水力発電に影響があるためとのこと。

以上調査は 18 年前の1988年 4月25日の定植当初の現地調査であり、従って、現代どこまで改良されているか定かでないが、ミャンマーの平坦地の高温、多湿、強日照を考えると比較的低温を好むトマト栽培は、南の高冷地タウンジーのインレー湖上のトマト栽培は所を得た技術と評価される。

今後、日本の雨よけ栽培法や、ボカシ肥えを使った施肥技術、点滴施肥技術等の試験検討がなされたら高品質安定栽培の向上につながるものと考察される。農薬は現代使用禁止のものも使われているので検討すべきであろう。

この農法は南米メキシコの伝統農業のチナンバス人工「水上菜園」、ボリビアのチチカカ湖での「水上菜園」と共通した古代農法ではないかと推定される。

インレー湖のインダー族、アステカ族、ケチュア族との関係がモンゴロイド系ではないか等、考古学や民族史的な史料からアグロエコロジー的に見て解明することを期待したい。



写真1



写真3



写真2



写真4



写真5



写真6

2012.2記  
(1988年JICA専門家として国立園芸研究開発  
センター勤務)

---

## 植物における病気の診断と防除の重要性

### 佐藤 俊次

元JICA派遣専門家 作物保護、病理担当  
大分県肥料植物防疫協会 顧問  
日本植物防疫協会 県主任試験員  
日出町在住  
shunaketaka310555@rainbow.plala.or.jp



---

1977年にJICAパラグアイ小農野菜生産技術改善計画プロジェクトに参加し、作物保護・病理担当として1年が経過した1978年3月に、私が「トマト・メロン栽培技術セミナー」で開会の挨拶

を行った時の内容を記すことにします。

またこの内容は、本年10月12日「おおいた国際協力啓発月間 in2013」において講演した一部であります。

### トマト、メロン栽培技術セミナー

Han pasado un año que vine a Paraguay por encargo de la fitopatología del proyecto de mejoramiento de la tecnología de producción de hortalizas para pequeños productores en Paraguay.

Todavía no puedo entender todas las cosas, porque las enfermedades de las plantas están apareciendo mucho por las temperaturas y la excesiva lluvia en Paraguay. Las cosechas no suficientes por las enfermedades, y las plantas.

Parece que en muchas cosas los cultivos sususpenden en el camino.

Nuestros hombres toman un refriado, tienen dolor estómago y pueden invadidos por el cáncer del virus desde nace hasta morir.

Entonces nosoteros necesitamos consulta al médico. *iverda! isí o no!*

Si, no consultamos a un médico, podemos vivir con buena salud para siempre. También en los mundos las plantas, cualquiera piensa; las plantas no tienen que caer enfermos y queremos obtener los productos de buena calidad desde siembra de las semillas hasta terminar las cosechas.

Pero, las enfermedades viven necesariamente por si misma y las vidas en proximas generaciones.

Este es problema grave.

Las gerras de las plantas y las enfermedades empiezan aquí.

El tiempo en Paraguay esta muy bien el ambiente por el crecimiento de las plantas y las enfermedades de las plantas.

La temperatura está bastante y está lloviendo.

Nosotros tenemos que cultivar las plantas, si se descuida un poco, después las enfermedades de las plantas aumentan con fuerzas y las plantas no pueden dar un fruto, entonces terminan la vida de las plantas.

Es muy importantes que preparar para correcto diagnóstico de las enfermedades y también es muy muy importantes que prevención y contorol con medios naturales y agroquimicos.

私は、パラグアイ小農野菜生産技術改善計画プロジェクトの病理担当として、パラグアイに来て、1年が経過しました。

全てについて理解したわけではありませんが、パラグアイは、気温が高く、雨が多いため、病気の発生が極めて多く、十分な生産ができずに、病気のために途中で栽培を中断してしまうケースが多いように見受けられました。

私たち人間は、生まれてから死ぬまでの間に、風邪をひいたり、お腹をこわしたり、ガンウイルスに侵されたりして、お医者さんのお世話になる訳です。そうですね、みなさん。お医者にかからずに、いつまでも常に健康でいたいですね…。

植物も種をまいてから、収穫が終わるまで、まったく病気にかからずに、品質の良い生産物を作りたいと、誰もが考えることです。

ところが病気自身も自分の生命をまっとうし、次の世代に命を引き継がなければならないので、大変です。ここに植物と病気の戦いが始まるわけです。

パラグアイは、病気の側からみれば天国なのかもしれません。気温は十分あるし、雨も適当に降ってくれるし……。植物を栽培して

いる私たちが、ちょっと油断するとたちまちのうちに、病気は勢力を拡大し、果実1個取れずに植物は一生を終わってしまうことがあります(写真1)。

病気に対して正確な診断をすることが非常に重要であり、生物的方法、化学的方法による防除対策が極めて重要です。

*Shunji Sato · Blanco Azucar*

Blanco Azucar は 白髪頭の砂糖  
という俗称です



写真1 育苗中～定植直後にオンシツコナジラミが媒介したトマト黄化萎縮病(TYLCV)の大発生…収穫皆無となる

---

# プーラビーダ

## 的 野 慶 子

元シニア海外ボランティア

---

派遣国：コスタリカ

派遣先：エレディア、国立ナショナル大学内  
高齢者プログラム（パイパン）

主な任務：大学構内にある高齢者施設におけるプログラム（日本のデイケアセンターに似ている）に参加し、運営改善、指導者育成、そして日本文化を取り入れた新しいクラスの創設を計る。また、市役所、クリニックなどとの連携行事に参加し、高齢者ホーム等の訪問活動も行う。

隊次：22 - 3

派遣期間：2011年1月～2013年1月

### ■ 高齢者プログラムでの活動の様子

“さあ歩きましょう”

・この話を選んだのはどうして？

先日、コスタリカの友人とスカイプを使って話をしていました。みなさんの健康状態（ほんとうに太った人が多い）、クラスの運営状態（折り紙、キャンパス歩行クラス等引き継いできたクラス）が気にかかります。その友人は言う。「去年のあのクリニックから今年も健康イベントやってくださいって電話がありましたよ。」

そうそう、あれは、エレディア市役所、クリニック（診療所）と大学が連携して行われたのでした。私の活動の中では最もよくコミュニケーションが取れたと思えるイベントでした。

・下見と打ち合わせ

クリニックの女医先生アレハンドラと当日の時間、場所などの確認、必要な物品などについて打ち合わせを行いました。いくつか質問をしています。

私…カミナタ（歩行）の参加者の中に杖をつけている方はおられますでしょうか？

アレハンドラ…いいえ、いません。みな元気です。（我々のようにと、職員を指す）

私…歩くのみではなく途中公園などで、筋トレ、ストレッチはどうですか？

アレハンドラ…（少し考えて）好きなようにしてください。

その後、看護婦、アレハンドラと共に、歩きの経路、公園などを見て回りました。公園内では、ここで、このような運動が出来るんじゃないかなどと検討しました。

帰宅後、参加者に対し水の補給が必要なことに気が付き、アレハンドラへ電話をするとすぐにOKが出て、休憩を取る公園へ車で運んでもらうことになりました。

・実施4日前 現地地下見

先日クリニックの先生たちと検討した道や公園を、今回は時計を持って歩き、歩行計画地図を作成しました。その公園の箇所には、必要な物品、予定の運動などを記入。そして最終地サッ

カー練習場に大量のゴミを発見。

・ソニア（通訳）を交えた打合せ

アレハンドラへ歩行計画地図を渡し、途中の公園での給水、最終地にゴミ袋、ゴム手袋など運んでほしい旨お願いしました。

最終地サッカー練習場を兼ねた公園は、お菓子・飲み物などの袋ゴミが多く散乱しており、汚く歩きにくい。そこで、ほんの3～5分でもいいからみんなで一斉にゴミを拾い、袋に入れる。その後、“歩きましょう”という案を出すと、すぐに“それはいいね。”と言われ、実施可能となりました。

・2012年3月29日（木）開催当日

簡単な開会式の後、近くの公園へ向かって出発です。

公園にて、5人の看護師さんへ私の方から前もって説明してあった公園の器具を使い、それぞれの地点で参加者へ運動の指導をしてもらいました。

ここの公園での、体操及びストレッチは、みなさんが普段の散歩の途中などで気楽にやってもらえるようにと思い取り入れたものです（写真1, 2, 3, 4）。



写真1



写真2



写真3



写真4

そして、次の休憩地の公園まで先導車に従って、青空のもと約10分間元気に歩きました（写真5, 6）。

公園へ到着。水のペットボトルをもらい、つかの間の休憩を挟んで、公園の周りをいろいろな手の動きを取り入れた運動をしながら歩きました。





写真5



写真6

・ゴミ拾い

次は最終地点、サッカー練習場のある公園へ向かいました。

到着後すぐに、全員がゴム手袋をはめて、ゴミを拾います。約5分間で、あんなに飛び散らかっていたゴミがすっかり大きなごみ袋2つに入りました。きれいになった公園でいろいろな足の動きを取り入れた歩きを行いました(写真7)。



写真7

約1時間の活動の後、出発地のクリニックへ戻り、スイカとパイナップルをもらって食べました。そのおいしかったこと!!!

---

## ザンビア — 柔道

仲 元 歩 美

元青年海外協力隊員



---

### ザンビアとは・・・

アフリカ南部の内陸に位置するザンビアは、日本の約2倍ある国土面積の中に、およそ1000万の人々が暮らしています。元イギリス領だったため公用語は英語ですが、現地語は72種類もあり、彼らはそれぞれ自分が属する言語にとっても誇りをもっています。

アフリカで最も平和な国のひとつであると言われていただけあり、人々の性格は温厚、陽気、少し悪く言えば適当。シェアの精神が溢れているため、何か困ったことがあったらすぐ手を差し伸べてくれるのですが、抜きん出ようとする意識が低いので、それが短所になっていると思うことも多々ありました。

気候は日本と似ているためとても住みやすいのですが、日差しが強いため現地の人並みに真っ黒になります。主食はどうもろこしの粉から出来たシマというもので、日本で言うお餅みたいなもの。それとちょっとしたおかず（野菜や小魚、たまにお肉）を手で食べます（写真1）。ザンビアン（ザンビアの人たちをこう呼びます）は、シマを5本の指を使って食べることが、自分たちのエネルギーの源であると断言しています。



写真1 シマを手で食べる

### ザンビア柔道

これまでザンビア柔道界には、40年間の間に24人の柔道隊員（長期）がJICAから派遣されてきました。多くの先輩方が指導に尽力されてきたおかげで、世界選手権やオリンピックに出場する選手も出てきました。さらに昨年12月に行われたユースの南部アフリカ大会では、南アフリカ共和国を抑えて最多の金メダルを獲得できました（写真2）。これから世界で活躍していく選手達が増え、ザンビアで関わった生徒達を世界の舞台で見ることができると期待しています。



写真2 2012南部アフリカ大会金メダル



写真3 柔道指導

### 柔道指導を行うにおいて

ザンビアの、特に私が住んでいたような地方の人達は、日の出と共に起床し、日が暮れると就寝というような生活をしています。時計はほぼ機能していないために時間に対する意識がなく、国民性も重なってみなマイペースに生きているため、練習だけでなく何をするにも時間通りに進みません。また毎日家の手伝いをしている子がほとんどで、日本のように毎回練習に参加できません。さらに、貧しいので一日一食しか食べられない人も少なくないので、激しいスポーツをするに適した環境ではありません。練習場所も常に確保されているわけではなかったため、草の上で練習することも多々ありました。

このように、日本では想像していなかった環境に飛び込んでの指導であったため、当初は彼らの生活や考え方が理解できず、練習どころではありませんでした。しかし次第に彼らの生活リズムが掴め、ザンビアンライフとうまく融合させながら指導することができ、非常に愉快的な柔道指導を行うことができました（写真3）。

### 最後に

数え切れないほどの素敵な思い出を持って無事に帰国出来たのも、現地の人や私を支えてくれていた全ての人のお蔭です。今後も色々なことにチャレンジし、日本社会に貢献していけるような人間になりたいと思います（写真4）。



写真4 my team

---

## ガーナ滞在記

衛 藤 さ き

元青年海外協力隊員



---

### ■はじめに

アフリカというと、サバンナの中をゾウやキリンなどの野生動物が走り回っている。ガーナというとチョコレートとイメージをする人がほとんどだと思います。ところが、ガーナのある西アフリカにはゾウやキリンといった野生動物はほとんどおらず、道端に生えているのはバナナやオレンジ、ヤシの木ばかり、ガーナ南部の山奥に行かないとほとんどカカオの木を見ることができません(写真1)。そして、驚くべきはチョコレートの値段。100%ガーナ産カカオで作られたチョコレートは日本でもよく見かける板チョコサイズで約250円。物価の安いガーナで250円というところのご飯を2回ほど食べることができます。自分の考えていたアフリカと違う現実に驚きつつも私のガーナでの生活が始まりました。



写真1 枝というよりも幹に実をつけるカカオ

### ■ガーナでの活動について

私は2010年6月から2年間、理数科教師としてガーナの公立高校に派遣されました。派遣された場所はブルキナファソとの国境に位置するガーナの中で最貧州のアッパーウエスト州。サバンナ気候のガーナ北部は乾季になると気温は40度以上で湿度が10%以下になります。常にドライヤーの風に吹かれているようでした。

活動内容は、高校生に対して数学の授業や補習など1教員として勤務することでした(写真2)。教員の数が足りないため、他の教員と同じくらいの授業数を持つことになりました。それ以外には、他の理数科教師や小学校教諭とともに、隊員間の情報共有やスキルアップ、ガーナの教育現場への情報発信などを目的とした理数科分科会で活動を行い、各地でワークショップなどを行いました(写真3)。

他の隊員と話していると、長期休み明けは指定した日に始まらない、教員の数が足りていない、教員が授業に来ない、一方的に教員が話すもしくは教科書を読むといったスタイルの授業が多い、勉強する環境(教室の整備)が整っていない、体罰が行われている、教員の給料が支払われていない、待遇が悪い(小学校教諭は副業しないと生活ができないほど給料が安い)などの共通する問題があがってきました。

年上や地位の高い人を敬うガーナ人にとって、私は経験もない日本から来た若い女の子と

映っていたと思います。そんな私にできることは、自分が時間通りに授業に行き、立体模型を使ったり、簡単なゲームを授業に取り入れたりすることでした。

また、他の理数科教師と協力してワークショップを開いて、ガーナ人教員に授業を見てもらったり実験をしたりしました。



写真2 授業風景

のではないのでしょうか。

私が日本に帰国してから、ガーナよさこい支援会が毎年行っているガーナの高校生と日本の高校生の交流会に参加し、教え子にも再会することができました(写真5)。自分の村から出た事のない彼女にとって日本はとても感動的だったようです。



写真4 広島原爆展を開催



写真3 ワークショップにて  
ペットボトルロケットに挑戦する生徒

#### ■ 日本文化紹介

クラブ活動の一環として、日本文化紹介を行っていました。この部活は2007年に勤務先の教員がJICAの研修で日本を訪れていたことがあり、クラブを設立したそうです。日本語のほかに、折り紙や箸の使い方、広島原爆展(写真4)、ガーナよさこい祭りに参加などの活動を行いました。日本に対する興味や関心が高く、クラブ活動を通して日本を身近に感じてくれた



写真5 日本で教え子に再会。よさこい祭りに参加。

#### ■ 青年海外協力隊に参加して

「アフリカ」とこの言葉だけではこの大陸は表せないと思いました。ひとつひとつの国があり、民族があり、言葉があり、暮らしがあるのだと。それはアフリカだけではありません。あっという間に過ぎた2年間でしたが、集団の中の個の大切さ、そして個と個のつながりの大切さを感じました。

そして、自分がいかににも知らない人間なのかということがわかりました。世界のことも、日本のことも。この経験を活かして日本も大分も元気にしよう！ BARKA YAGA (ありがとうございました)

---

## 大分大学国際医療保健フォーラム HORIZONの活動紹介

坂 田 優

HORIZON代表  
unhmuhnmnu@ezweb.ne.jp



---

2012年夏、大分から海外に飛び出し、世界の広さ、複雑さに衝撃を受けた学生たちが、「大分でも国際医療保健の分野で経験豊かな皆さんの話を聞く機会を得たい」との思いで立ち上げたのが私たち HORIZON というサークルです。主な活動は、国際的に活躍されている医療関係者の方へお願いしてご講演していただくというものです。医療関係者はもちろん、一般の方や国際医療に関心がなかった医学生にも気軽に来ていただきたいと思い、予約不要、参加無料の

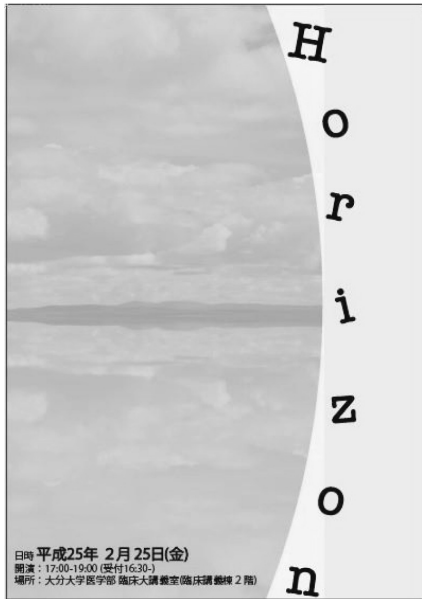
形式で大学内にて開催しています。また、そのような講演以外にも、先生と学生の距離が近いワークショップ形式の小さな講演会も mini HORIZON と称して行っています。さらに、ベトナムでのスタディーツアーを執行したり、九州山口の他大学の国際医療系サークルと合宿したりと、立ち上がったばかりのサークルではありますが、学内の先生方の手厚いご協力もいただき、手さぐりで多くのことにチャレンジしています。



### 第1回 HORIZON (2013年2月15日)

長崎大学熱帯医学研究所教授でありベトナム拠点長の山城哲先生、元青年海外協力隊看護師であり元 JICA 在外健康管理員の簗戸由紀看護師、大分大学と提携関係にあるフィリピンの感染症拠点病院 DOH サンラザロ病院の医師、看護師の方々にご講演いただきました。大分大学には4年次に研究室配属という期間があり、希望者はこのサンラザロ病院にて2週間研修する

ことができます。まさにこの研修が HORIZON 創設のきっかけとなったのです。また、山城先生にはこのご講演を縁に、ベトナムスタディーツアー際、内容のコーディネートなど大変お世話になりました。



第2回 HORIZON (2013年7月5日)

国境なき医師団日本会長の黒崎伸子先生をお招きしました。大分大学の学生だけでなく、病院の先生方や高校生も多く来場してくださいました。国境なき医師団といえば、日本人ならだれでも知っていて医学生なら一度は憧れを抱く存在です。自分の将来をより具体的に考えることができました。



第3回 HORIZON (2013年11月15日予定)

大分医科大学9期生である吉岡秀人先生が設立したNPO法人JAPAN HEARTの吉岡春菜先生と箱田祥子看護師をお招きします。

HORIZON ができてからもうすぐ一年が経とうとしています。私は代表といっても二代目で、実際にこのサークルを立ち上げたのは一つ上の先輩方です。私はもともと国際医療には興味があったのですが、それはただ漠然とした憧れでしかなく、今から比べるとその実態についてほとんど何も知りませんでした。しかし、先輩に誘われてこのサークルに入ってからというもの、医学留学、研究、短期医療ボランティア、紛争地帯での医療援助、途上国の医療者、さまざまな形で世界と繋がる医療関係者たちの生の声を継続的に聞くことができ、自分なりに国際医療について考えることができるようになりました。特に強く印象に残っているのはベトナムのスタディーツアーで、現地の基幹病院でベトナム医療の現状やJICAの支援を、前述した長大熱医研ベトナム拠点とそこでの研究サンプルを集める地方の病院で熱帯医学研究の実際を目撃しました。また、山城先生の計らいで琉球大学の学生と合流したり、現地で働く先生方とごはんを共にできたりと、とても楽しく充実したものでした。ありきたりな言葉になってしましますが、私はこれらの経験を通して、医師という職業の選択肢の多さ、医師の有益性、保健分野の大切さ、国々の常識(文化・生活)の違い、そして何より自らの無知を痛感しました。高い

モチベーションを持っている人ならば、積極的に情報を集め知識を得て経験を積むことは可能です。しかしそのような人は稀で、知らないものというのは、どこから調べたら良いのかもわからず知らないままに終わると言うことが殆ど

です。情報は知っている人にもみ開かれているかのように思えます。私たちHORIZONは、私のように国際医療保健という分野への入り口を知らなかった人がその扉を開くための案内人のような役割ができればと考え、活動しています。





## とっておきの写真1枚



写真 タンザニア国にあるカシューナッツの加工工場

今回の「とっておきの一枚」は 会報17号の中から編集者で選ばせて頂きました。でもこの写真は迫力があると思われませんか?この写真をカラーで、しかも27インチのパソコン画面で見るとすごいと思いました。作業をされている女性の皆さんの手元には機械らしきものは見当たりません。今の時代、世界中のカシューナッツ工場で、このような手作業で行われているのでしょうか?それにしても、すごい人海戦術です。この工場が機械化されるとどうなるでしょう?皆さんが職を失い、現金収入の道が絶えて生活に困る方もおられるでしょう。また病気になっても病院に行けなくなるかも知れません。負のスパイラルにならないためにも、産業が発展しても雇用の確保が出来るようになるまで、このような工場が存続して欲しいとつい思ってしまいました(編集部記)。

## 大分県 JICA 派遣専門家連絡会事務局便り

### 連絡会からのお願い

平素は本会に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。  
さて、会員の皆様にごお願いがございます。

本会はできるだけ多くの JICA 派遣専門家の方にお集まりいただきまして、  
各々時々の経験・ノウハウ等を伝えて頂き、それらを多くの JICA 派遣専門家の  
皆様と共有したいと考えております。

そのため、会員の皆様ならびに関係の皆様へ、ご意見ご報告を本会会報へ  
投稿していただけますようお願いしております。

また、JICA 派遣専門家連絡会の主たる機能となりました「国際協力に対する  
市民への理解促進活動」のため市民講座等での報告発表も会員の皆様にご願  
いしております。

しかしながら先般個人情報保護法が成立しました影響をうけまして、法施  
行後の JICA 派遣専門家の個人情報がまったく得られない状況にあります。

そこで、皆様のお近くに JICA 派遣専門家で本会への入会を希望されな  
がら、本会から総会案内状及び会誌が届いていないという方がおられました  
ら、ぜひともお知らせいただけますようお願いいたします。

大分県 JICA 派遣専門家連絡会

幹事 中山 晃一

# 大分県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成14年3月1日制定)

## 1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び大分県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、持てる知識・エネルギー等を集結して、前記の動向の有効な発展に質すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

## 2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係る事業を行う。

- (1) 政府開発援助（ODA）の進展動向に関する調査研究および提言
- (2) JICA 及び JICA 九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3) 大分県と海外諸国（特に発展途上国）との国際交流活動の促進、充実に質する諸活動
- (4) 会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること。

## 3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

## 4. 会長及び幹事

- (1) 会の運営を円滑に行うため、当会に会長を1名置く。また、世話役として2名、会計役として1名、計3名の幹事を置く。
- (2) 会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3) 幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当たる。
- (4) 会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5) 本会に顧問として、JICA 九州国際センター所長の職にあるものを充てる。
- (6) 本会は必要に応じ会計監査役2名を定めることとし、総会の議を経て会長が委嘱する。
- (7) 本会に事務局長及び編集責任者を定め、会長が委嘱する。

## 5. その他

この申し合わせ事項を改変し、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、総会の議を経て施行する。

以上

## 付則

この申し合わせ事項は、平成19年2月2日に一部改定し施行する。

この申し合わせ事項は、平成20年2月6日に一部改定し施行する。

## 編集後記

大分県JICA派遣専門家連絡会の会報は、皆様のご支援により17号を発行することができました。特に独立行政法人国際協力機構JICAデスク大分国際協力推進員の渡辺了孔様には、原稿集めで多大なご協力をいただきました。皆様方に重ねてお礼を申し上げます。

本号の巻頭言としまして、大分県JICA派遣専門家連絡会の森 宣会長には、「国際協力を志す前に、日本人は多様性を受け入れているのだろうか」という題で書いていただきました。独立行政法人国際協力機構九州国際センター(JICA九州)の勝田幸秀所長には、「元気なタンザニア、元気なアフリカ」という題で、大分市企画部文化国際課国際化推進室の林 理子主事には「おおいた国際協力啓発月間 in2013」という題で、おおいた有機農業推進ネットワークの高倉志能顧問には、「ミャンマー・インレー湖におけるトマトの浮畑栽培」という題で、元JICA派遣専門家(作物保護、病理担当)・大分県肥料植物防疫協会顧問・日本植物防疫協会 県主任試験員の佐藤俊次氏には、「植物における病気の診断と防除の重要性」という題で、元シニア海外ボランティア的野慶子様には、「プーラビーダ」という題で、元青年海外協力隊員の仲元歩美様には、「ザンビア-柔道」という題で、元青年海外協力隊員の衛藤さき様には、「ガーナ滞在記」という題で、大分大学国際医療保健フォーラムHORIZON代表の坂田 優様には、「大分大学国際医療保健フォーラムHORIZONの活動紹介」という題でご執筆いただきました。また、九州国際センター(JICA九州)の勝田幸秀所長には、「とっておきの写真1枚」をご提供いただきました。本号も、ユニークな内容になるようにいろんな分野の方々に執筆をお願い致しました。お忙しい中での御投稿に感謝申し上げます。

10月6日(日曜日)の「国際協力の日」に合わせて、大分市およびJICA九州主催の「おおいた国際協力啓発月間in2013」(<http://www.city.oita.oita.jp/www/contents/1376280886690/index.html>)に本連絡会が参加する形で、10月12日(土曜日)13:00~14:30に、iichico総合文化センター地下1階映像小ホール(OASISひろば21内)において、講演を行いました。本連絡会会員である元JICA派遣専門家の佐藤 俊次氏が「国際協力で見えた南米パラグアイの農業試験研究=植物にも病気の予防土地量が必要=」と題して、パラグアイの農業発展のため活動した体験を話されました(本誌に関連記事)。

本誌には、投稿された方々の御快諾を得まして、個人情報の一部が掲載されています。読者の皆様には、個人情報の取扱に細心の注意を払われますように御配慮の程御願います。なお、本誌は、JICA九州のホームページ(<http://www.jica.go.jp/kyushu/>)の「JICA派遣専門家会連絡会」専用ページに掲載される予定です。大分県JICA派遣専門家会の会報は、冊子体の体裁を維持しております。これはひとえに、本連絡会を支えてくださる会員および関係各位の皆様からの原稿により維持されています。写真のみ、あるいは1ページの原稿でも編集者宛にお送りください。次号の御投稿をお待ちしております。

### 編集責任者の交替

会報10号までの編集を担当された脇坂昌記先生から、私にバトンが委ねられまして既に7年が経過しました。自転車操業的に毎年編集業務を行ってきまして、気がつけば17号の刊行となりました。キリのよい20号でと思いましたが、定年を控えておりまして、いろんな仕事を整理する時期となりました。17号の会報を持ちまして、田上秀一先生(stanoue@oita-u.ac.jp、大分大学医学部放射線医学講座)に編集の任をバトンタッチする事となりました。

7年間、会報を支えてくださった方々に感謝致しますとともに、これからも冊子体の形を維持した会報のために、御支援の程よろしくお願い申し上げます。

江下優樹  
大分県JICA派遣専門家連絡会会報編集責任者  
〒879-5593 大分県由布市挾間町医大ヶ丘1-1  
大分大学医学部感染予防医学講座  
電話/Fax: 097-586-5701  
yeshita@oita-u.ac.jp

---

---

## 大分県 JICA 派遣専門家連絡会会報(17号)

2013年12月10日

編集および発行 大分県 JICA 派遣専門家連絡会  
会 長 森 宣  
編集責任者 江下優樹  
〒879-5593 大分県由布市挾間町医大ヶ丘1丁目1番地  
大分大学医学部感染予防医学講座  
TEL/FAX (097) 586-5701  
E-mail yeshita@oita-u.ac.jp  
印刷所 株式会社 電子印刷センター  
TEL (0977) 66-5365, FAX (0977) 66-5383

---

---